

---

# 独裁生徒会長サクラン

沙 亜竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

独裁生徒会長サクラン

### 【Nコード】

N8645X

### 【作者名】

沙 亜竜

### 【あらすじ】

時は新世界暦十二年。全世界規模のデータ管理システム「ギヤラクシュー」が整備され、汎用端末「エアコム」によって全人類が情報を参照可能となっていた。射干玉ぬはたまじよち除夜は都立神龍学園の高校一年生。初日から大遅刻した除夜の前に、生徒会長サクランが現れ、強制的に会長補佐にしてしまう。この学園では、生徒会長がすべての決定権を持っている。不満ならばデュエルを申し込み、戦って勝てばよい。勝った者が次の生徒会長となるのだ。そんな生徒会長の補佐として、除夜は様々な出来事に巻き込まれていくことになるのだった

o

ふわ……。

春の温かなそよ風が、僕の鼻腔をくすぐりながら通り過ぎてゆく。ぼかぼかと、体ばかりでなく心までをも温めてくれそうな日差しが、僕の全身をそっと抱きしめてくれているかのように包み込む。

住宅街の中を歩いていても、たまに植えられた桜がその姿を見せて、目を楽しませてくれるこの季節。

河川敷に沿った並木道なんかだったら、もっとたくさんの桜が花びらをこれでもかと言わんばかりにまき散らし、足先からもその桜色の存在を思う存分感じられるだろうけど。

でも僕は、ちょっと薄汚れた印象すら受ける静かなこの住宅街の雰囲気が大好きだ。

幼い頃から慣れ親しんだこの町。今歩いているこの道は、いつも通っていた通学路からは少々離れていて、ほとんど足を踏み入れた経験はなかったように思う。

だけど今日からはそれこそ毎日のように、ここが僕の通り道となることだろう。

やがて、住宅が密集して立ち並ぶ地域を抜けると、畑や田んぼが目立つようになってきた。

その向こうには、周辺の景色と比べると若干高めで綺麗な建物の姿が見え隠れしている。

「それにしても、今日は暖かいな……。絶好の入学式日和だ」

徐々に視界に映り込んできた建物は、高校の校舎だった。塀に囲まれた広い敷地内に、いくつかの棟が建てられている。

都立神龍学園。

それがその高校の名前で、僕が今目指している場所でもあった。

今日は入学式。そして僕は、その高校に今日から入学する新入生のひとりだ。

真新しいブレザータイプの制服に身を包み、気分も晴れやか。温かな日差しも、僕を祝福してくれている。

正門が近づいてきているというのに周りに誰もいないのは、登校する時間とは完全にずれているから。

気持ちが高ぶって早めに来てしまった……というわけでは、もちろんない。

なにを隠そう、僕は初日から大遅刻をしてしまった身なのだ。

それなのに焦っていないのは、今さら焦っても仕方がないというものもあるけど、なんといいっても僕のものにも動じない、どつしりと構えた大らかな性格の賜物と言えるだろう。

「さてと、僕のクラスはどこかな」

大遅刻なんてまったくこれっぽっちも気にせず、クラス発表の貼り紙などがしてあるであろう体育館横の掲示板辺りをきよきよろと見回していると、その人は風のごとく、いや疾風のごとく、いやいや嵐のごとく、突如として目の前に現れた。

「おい、そこのお前！ 新入生だな！？ 入学式から遅刻とは、いい度胸してるじゃないか！」

生活指導の先生であるかのような物言い、雷鳴のごとき大声を伴い現れたその人は、しかし、教師ではなかった。

ブレザー姿。

襟もとはネクタイではなくリボンが結ばれ、視線を下げればスカートがそよ風に揺らめいている。

両手を腰に当て、リボンの上からでもそのボリュームが存分に感じられる大きな胸をビシツと張って威風堂々と立っている姿は、女性ながらに凄まじいほどの凛々しさをかもし出していた。

サイドテールにまとめた長く綺麗な黒髪がそよ風にたなびく様も、その凛々しさを際立たせる要因となっているだろうか。

どうやら彼女は、この学校の子生徒のようだ。

とすると、風紀委員とかそういった立場の人で、遅刻した僕を注意しに来た、といったところか。

おそらくは上級生なのであろう彼女は、僕の返事がないのを見ると、ツカツカと早足でにじり寄ってきた。

少々つり上がり気味ではあるものの切れ長の目は眼光鋭く、眉尻も上がり眉間にはシワもできている。

怒りの形相、いや般若の形相、はたまた悪魔の形相か。

僕は思わずあどさる。

「逃げるな！」

再び落とされたいかずちによって、繰り出されつつあった逃げ足は一瞬で止まる。

悪魔の形相をした彼女は、もう僕のすぐ目の前まで迫ってきていた。

そんな状況にあっても、その女子生徒から春風に乗ってふわりと微かに漂ってくる爽やかな心地よい香りに、つい頬が緩んでしまう。

背の低いほうである僕よりも、彼女の視線のほうが、わずかに上……。

彼女は右手を伸ばし、人差し指と中指の二本を使って僕のアゴを持ち上げると、ぐいっと顔を近づけた。

目と目が合う。

へびに睨まれたカエル状態の僕。

この胸のドキドキは、きつとトキメキとかそういう類のものではないだろう。

「お前、名前は？」

すぐ目の前から質問を投げかけられ、彼女の吐息が僕の鼻先をかすめる。

とはいえ、今の僕は、恐怖の念に支配されている状態。

怯えた視線を返しながら、素直に答えとなる言葉を紡ぎ出すことしかできない。

「射干玉……除夜です……」

「除夜、か……。射干玉という名字も変わっているが、名前のほうも独特だな」

「はい、よく言われます」

実際のところ、変わった名前なんて、あまりいいものではないと思う。

絶対に最初は間違われたり読めなかったりするし。

僕の場合は、とくに名字のほうか。たいてい、なんて読むの？と訊かれてしまう。

ただ、変わっているからこそすぐに覚えてもらえる、という利点もあるかもしれないけど。

「除夜の鐘……。百八つの煩惱の回数叩くというやつだな。とすると、お前は煩惱だらけの人間ということか？」

初対面なのに失礼な、と思わなくもなかったけど。でも、こういったことも、よく言われてしまうことだ。

だいたい除夜ってだけなのに、どうして鐘までつけてしまうのか。除夜というのは、大晦日の夜のことを表しているだけだということに……。

それに除夜の鐘だとしても、百八回鳴らすというのは、百八つの煩惱を振り払うという解釈の他にも、十二月二十四節氣七十二候の一年間を示すとか、四苦八苦で四×九＋八×九で百八だとする説なんてのもあるというのに。

あまりに間違われるので調べまくった知識が、頭の中を駆け巡る。だけどカエルの僕は、ヘビな彼女に齒向かえない。

「……そんなんじゃないです……」



一瞬の沈黙ののち、せめてもの抵抗として、小さくこう答えることだけしかできなかった。

「すまん。少々調子に乗りすぎた。気を悪くしないでくれ」

怯えきった僕の様子を見て、さすがに罪悪感を覚えたのか、彼女は僕のアゴから指を離し、正常な会話位置を取るよう一步下がった。

そして一旦のどを鳴らすと、こつ名乗りを上げた。

「私はこの学園の生徒会長をしている、二年の華神桜蘭かがみさくいらんだ。よろしく頼む」

なるほど、生徒会長だったのか。

立場上、風紀委員よりもさらに上、ということになるわけだし、入学式からの大遅刻にお叱りを受けたのも頷ける。

よく見れば、彼女の右腕にはしっかりと、生徒会長と書かれた腕章がつけられていた。

……と、あれ？

でも今つて、ちょうど入学式が行われている最中では……。

確か、入学式と始業式を同時に行うスケジュールだったはずだから、二年生の先輩だとしても、会場の体育館にいななければいけない時間帯なんじゃ……。

そんな考えは表情にも出ていたのだろう、「どうした？」という会長の問いかけに、僕は率直な疑問をぶつけてみることにした。

「ふむ……。なんだ、そんなことか」

会長は、事もなげに答えを返してくれた。

「私は入学式だとかあんな面倒な式なんぞに出たくない。だからエスケープした。それだけだ」

それは、「当然だろう？ なにか問題あるか？」とでも言わんばかりの、堂々とした答えだった。

「生徒会長というのはだな、全校生徒のトップなのだ。ゆえに、どんなワガママも許される。すべてが自分の思いどおりになる、夢のような役職なのだ」

とんでもないことを言い放った会長。

「そ……そんなことで、いいんですか!？」

「うむ、いいのだ」

僕が声を荒げて、会長は涼しい顔。

そうか……この人、なにを言っても無駄な人種なんだ。

とはいえ、睨まれ続けながらもどうにか耐えていると、カエルでもどうにか慣れてくるものなのか、それとも会長が言葉を返すだけで、どうやら暴力には訴えてこないようだと判断したからか。

ともかく僕は、徐々に反撃ののろしを上げ始めていた。

「だいたいそんな自分勝手な態度じゃ、他の役員たちだって黙っていないでしょう!？」

おそらく常識的と思われる僕の意見にも、会長はとくに慌てる様子もなく。「なにを言っているのだ、お前は」といった感じで、若干呆れたような顔を向けてくる。

「お前……さては、学園の規則だとかそういう資料には、まったく目を通してないな?」

「え……?」

言われて、はたと考える。  
そんな資料、あったっけ？

もともと僕がこの学校を受験した理由はふたつ。  
ひとつは単純に家から近かったから。

そしてもうひとつは、こちらの理由のほうが強いのだけど、幼馴染みの女の子に言われたからだ。

家が隣同士で、幼稚園からずっと一緒だった女の子。高校受験の志望校を決める際に、どういうわけか一緒の学校を受験しようと言い出した。

まあ、将来の夢なんかもまだ見つけられていない僕としては高校なんてべつにどこでもよかったし、彼女の申し出を素直に聞き入れたのだけだ。

考えてみたら、ここがどんな学校なのか全然知らなかった……。

創立から十年ちょっとと新しい学校ではあるけど、学業のレベルとしてはそれなりに高いらしく、親も反対することなく、すんなりと受け入れられた感じだった。

そういえば今朝家を出るとき、「いきなり遅刻なんて大丈夫かしら？ 監禁されたり拷問されたりしない？」などと、なんだか物騒なことをお母さんから言われたような……。

「安心しろ。監禁だの拷問だの、そんなことはありえない。……今は、な」

ついつい口からこぼれてしまっていた僕のつぶやきを聞き咎めると、会長はそう言った。

……え？今は……？

一瞬、背筋が凍る。

じゃあ、今じゃなかったら……以前のこの学校だったら、それもありえたってこと？

「……本当に、なにも知らないんだな」

再び漏れ出していた怯えを含んだ僕の言葉に、会長はさらに答えを返す。

「ま、実際、そこまでやろうとしたヤツは、すぐに蹴落とされることになったわけだが」

????

僕にはどうも、この神龍学園というものが、よくわからなくなってきた。

いったいどういう学校なのだろう？

「学校としては、さほど変わっているわけではないな。少々レベルの高い進学校、といったところだ。……ただ」

「ただ？」

「さつきも言ったように、生徒会長に学園に関するほとんどすべての決定権が与えられる、いわば独裁政権的な校風になっているのだ」

ドツゴオオオオン！

両手を腰に当て、再び大きな胸を張って偉そうにふんぞり返っている会長の背後には、ど派手な爆発エフェクトのようなものが見えた気がした。

「つまり、私がこの学園のルールであり、そして神である、ということだな」

わざわざ言い直す必要もないと思うのだけど、というツッコミは飲み込んでおく。きっと、無意味だから。

「ついでに言うと、さっきお前が心配していた、他の役員たちが黙っていない、といったことも、ありえない」

「……絶対的権力でねじ伏せるから、ですか？」

なんとというか、もう完全に諦めモードに入った僕は、力を失った声で尋ねる。

「いや、そうではない。そもそも、他の役員自体がないからな。生徒会長のひとり舞台というわけだ」

「それって、生徒『会』とは呼べないのでは……」

「ふむ、まあ、確かにそのとおりだな。しかし、生徒長では語呂も悪いし、生徒会長という呼び名で構わないだろう」

「いや、べつに呼び名の問題じゃないんですが……」

うーん、なんとというか、僕はとんでもない高校に入学してしまったのではなからうか。

今さらそう思っても、あとの祭りというものだろうけど。

「で……でもそれじゃあ、なにかと大変なんじゃないですか？」

生徒会といえは、様々な学校行事に関して詳細にわたっているりと決めていかなければならない役職のはずだ。

先生方がある程度サポートしてくれるにしても、ひとりの生徒に

押しつけていい仕事量ではないように思う。

「おお、そうなのだ！ わかってくれるか！ いやあ、私の目に狂いはなかったということだな！」

「え？」

急にランランと目を輝かせ、会長は両腕を胸の前に組んで、うんうんと頷き始める。

「大変なのだよ、私は。そういうわけで、射干玉除夜、お前を拉致……もとい、生徒会長の補佐役に任命する！」

「え……え……と……」

この人今、拉致って言った！

「私の片腕となって、せいぜい頑張って働いてくれたまえ！」

「あ……あの……」

働くって、いったいなにをさせようというんですか！？

「喜ぶがいい、これはとても名誉なことなのだぞ？ 私が楽できるように……もとい、全校生徒のために！」

「だから、その……」

会長、説得力、なさすぎですってば！

僕の悲痛な叫びが言葉として飛び出すことはなく、次の瞬間には、

「除夜、今後ともよろしく頼むぞ！」

ぎゅっ、と僕の右手は会長の両手の温もりによって包み込まれて

いた。



「それでは、端末を開いて、補佐としての登録をしておけ」  
「……はい」

僕は仕方なく、右手を目の前に出し、人差し指をすつと横にスライドさせ、端末のウィンドウを開く。

今現在、全世界のすべて国で、『エアコム』という汎用端末がひとりひとつずつ支給されている。

国民ひとりひとりの名前や年齢などの個人情報を初め、職場や学校での役割、友人関係、果ては所持金まで、すべての情報がこの端末によってデータ管理されている。

実際には、この端末は中央コンピューターに登録してある情報の呼び出しと、情報の書き換えなどを行うためのツール、ということになるわけだけだ。

ウィンドウは目の前に半透明の状態で見れる……ように見える。ように見える、と表現しているのは、物理的にモニターが出現するわけではないからだ。

利き腕に巻きつけられた腕輪……というよりも、昔流行ったミサングに似た形状と言ったほうがわかりやすいだろうか。

これが、支給されている端末 エアコムの本体だ。指先の動きに応じて、ウィンドウが出現させたり消したり、各種ウィンドウの操作を行ったりする機能がある。

腕を通して脳に微弱な電気信号を送り、目の前にあたかもウィン

ドウが出現したように見せる能力とセットになったこの端末を通して、様々な個人情報管理されている。

正確に言えば、個人情報の管理だけに留まっていけないのだけ、その辺りは必要になったらおいおい語ることにしよう。

そういった様々な情報が扱え、また、電話やメールなんかの機能もあり、お店では電子マネーとしての役割も担う、生活の必需品と言っても過言ではない端末、それがエアコムだ。

なお、このエアコムによって目の前に開かれるウィンドウは、『エアウィンドウ』と呼ばれている。通常は単にウィンドウと呼ばれることも多いのだけど。

僕はそのエアウィンドウを開き、自分自身の情報の中から、関係性のカテゴリを選択する。

そこには、現在の自分の立場などが登録されている。今表示されているのは、都立神龍学園一年、というデータのみだ。

目の前に出現した（ように見える）ウィンドウの中で、表示されている情報の辺りを軽く人差し指で触れる。

すると、詳細な情報として、生徒会長補佐という役割のデータが追加された。

どうやら頭の中で考えていることを脳の電気信号から読み取り、追加されるシステムになっているらしい。

自動で勝手に情報の追記をせずに、エアウィンドウを開いてデータにタッチするなど指先の動作が必要となっているのは、誤った情報追加を防ぐためだとか。

考えたことがすべてデータとして中央コンピューターに登録されてしまったら、妄想なんかまで追加されてとんでもないことになるだろうし。

「よし、登録完了したみたいだな。こちらからも確認した」  
「はい」

会長の言葉に頷く。

登録された個人情報には公開レベルというのが設定されていて、顔見知り程度以上の関係性であれば、名前や年齢といった基本情報は誰でも参照することが可能なのだ。

と、不意に騒がしい声が風に乗って漂い始めた。  
視線を巡らせてみれば、体育館から出た生徒たちが渡り廊下を通って校舎へと向かって並んで歩いていく姿が確認できた。  
体育館脇の出口からは、入学式を見に来た新入生の親御さんが出てくるのも見える。

「どうやら、入学式が終わったようだな」  
「そうですね」

果たして僕は、今ここに居ていい身分なのだろうか？

「とりあえず、補佐の件は了解しました」

というよりも、拒否権なんてなさそうだし。

心の中で愚痴をこぼしつつ、僕は会長に言う。

「うむ」

「そういうわけで、僕はこれで失礼します。さすがに教室には顔を出さないよ……」

「おお、そうだな。それでは、私も同行しよう」

「え？」

どうして二年生の会長が僕のクラスにまで同行しようとするんだ？  
疑問は顔に表れていただろうけど、会長は意に介することもなく。

「ほら、行くぞ」

彼女は僕の手を取り、スタスタと歩き始めていた。

「ふむ、除夜は……一年C組だな」

会長はエアコムのウィンドウを操作し、神龍学園の情報サイトからクラス分けを確認していた。

全世界のほぼすべての情報が、このエアコムで管理されている現在、学園のクラス分けもこうして端末から確認できるということ、僕はすっかり忘れていた。

もっとも、機能や情報量の多さから、エアコムを使いこなせない人も中にはいる。

そういう人のために、体育館横の掲示板にはクラス分けの紙が貼り出されているのだけだ。

「私は二年A組のようだな。ま、あまり興味はないが」

「いや、そこは興味を持ちましようよ……」

クラスメイトが聞いたなら不快に思いそうなセリフを放ちながら、会長はさっさと昇降口へと向かった。

「お前も早く上履きに履き替えて準備しろ。一瞬だけとはいえ、クラスに顔を出すわけだからな」

「え？　一瞬だけ？　それってどういう……」

「なにをグズグズしている。早くしろ」

僕の質問の言葉なんて、会長にとっては雑音の一種でしかないの  
だろうか、まったく答える気配さえ見せず、ただただ急かされるば  
かりだった。

入学式が終わり、最初のホームルームを始めたばかりであろう一年組の教室に、突然の乱入者が現れた。  
それはもちろん、会長と僕なのだけだ。

呆然とする生徒たちと担任の先生の視線を一身に受けながらも、まったく怯む様子すらなく、会長はずかずかと教壇へと歩を進める。悠然とした態度は、さもそれが当たり前前の行動であるかのよう。担任の先生が、あまりの勢いに教卓前の定位置をあっさりと譲り渡したところからも、その堂々たる姿が想像してもらえるだろう。

そして、腕を引つ張られながらひよこひよここと教室へと入ってきた僕は、会長とは正反対に、とつても情けなく見えたことだろう。

……と、微妙などよめきが広がり始めている生徒たちの中に、知り合いの顔が混じっているのを発見する。

幼馴染みの柏葉かしわばちまきだ。

一緒のクラスだったのか。クラス分けの情報をゆっくり見ている時間もなかったから、全然気づかなかった。

彼女は微かに首をかしげながら、訝しげな視線を送ってくる。

あんた、なにやってんの？ っていうか、その女、誰？ とでも言いたげな目だ。

とはいえ、ただ引つ張られるだけの僕に答える余裕なんてない。  
バン！

会長が教卓に両手をつく。どよめきが一瞬で静まる。  
そしてコホンと咳払い。

「二年A組、華神桜蘭。この学園の生徒会長だ」

会長は凜とした声を張り上げ、手短な自己紹介を済ませると、続いてこう宣言した。

「このクラスに所属するこいつ　射干玉除夜は、私のものとなった。というわけで、よろしく頼む。以上！」

今までの横暴な態度から、なんとなく想像はできていたけど。

どうやら僕は会長にとって、補佐というよりも、手下とか下僕とか、そういう扱いのようだ。

それにしても、『私のもの』って……。その言い方はないんじゃないかならうか。

などと考えはしたものの、僕に反論するような権限なんてないんだらうな〜と、黙って成り行きを見守る構えに入る。

担任の先生も生徒たちも、呆然としながら、会長と僕の姿を交互に眺めるばかり。

同じ中学から来た生徒も中にはいるようだけど、クラスメイトとはいえ基本的にはまだほとんど誰も僕のことを知らないのだから、自然な反応と言えるのかもしれない。

このまま僕が『会長のもの』という認識で決定づけられるかと思っただけだ、

「ちょ……ちょっと！　私のものって、どついうことですかっ!？」

ガタツと大きな音を立てて椅子から立ち上がった生徒が、ひとりだけいた。

「幼馴染みのちまきだ。」

「言葉どおりの意味だが？」

平然と答える会長。

そ……そんなふうに言ったら、絶対に違う意味で取られます！

「な……！」

絶句するちまき。

うん、完璧に誤解している目だ。幼馴染みだからよくわかる。いや、そうでなくても簡単にわかりそうだけど。

会長の宣言は、さらに続いた。

「それと、除夜には通常の授業はすべて生徒会室で私とともに受けてもらう」

授業はもちろん、それぞれの教室で行われる。

通常は自分の教室で授業を受け、必要があれば理科室など実験設備のある教室に移動するわけだけど。

大抵どこの学校でも、通常の授業においては、許可さえもらえば教室以外の場所からでも受けることができる。

それは、エアコムの機能があるおかげだった。

教師が授業する姿は、エアコムの映像転送機能によってどこからでも見ることが可能。

担当教師から許可を受けた生徒は、どこで授業を受けてもいいことになっている。



なお、教科書類はすべてエアコム内にあらかじめダウンロードされ、データとして入っているので、わざわざ持ち運ぶ必要もない。

また、教師が黒板に書いた内容もそのままデータ化されて、エアコムから参照可能となる。

黒板に書かれた内容以外にメモしておきたい場合でも、エアコム内の個人用ノートに記述できるようになっている。

教室移動の必要がある教科や体育なんかは、さすがにエアコムの機能ではまかなえないため、全員が同じ場所に集まって授業を受ける必要があるけど、それ以外の教科であれば保健室登校の生徒でも受けられる仕組みになっているのだ。

「そ……そんな……！　せつかく同じクラスになれて、一緒に授業を受けられるって思ってたのに……！」

ちまきが、なんだかすぐく残念そうな顔で会長を睨みつけながらつぶやく。

幼馴染みで小学校からずっと僕と一緒に学校の学校に通っているちまきだけど、運悪く一度も同じクラスになったことがなかった。

そっか、ちまき、そんなに楽しみにしてたのか。

クラスが違ってても、一緒に登校したり、頻繁に僕の部屋に押しつけてきたり、今までだってなんだかんだでかなりの時間、一緒に過ごしてきたというのに。

「というわけで、これは私のものとなった」

「いや、僕は会長補佐ですから。会長のもの、ってわけじゃないです」

所有物扱いが続いたことへの反抗の気持ちもあつたけど、ちまきに誤解されたままだととにかくと厄介なので、僕はきっぱりと言いつつ。

「会長補佐……そっか、なるほど、そうなんだ……」

と、納得しかけたちまきだったものの、すぐに会長が余計なことをつけ加えた。

「補佐というのは、私の手となり足となり働いてくれる存在だろうか？ 私のためにどんなことでもしてくれる役割、というわけだ。そうすると、やっぱり私のものと言っていいのではないか？」

「ど……どんなことでもって、なにをさせるつもりですかっ！？」

ちまきの言葉に、会長はニヤリと笑う。

「さて……なにをしてもらおうか。私は有能だからな、仕事の手伝いはさほどいらないだろう。ということは、私の欲求を満たすための手伝いをしてもらおうというのが、有効な使い方なのかもしれないな」

「な……！？」

「たとえば、あんなことやこんなことや……むふふふ」

「ちょ……なに言ってるんですか！？ そんなの、補佐の役目じゃないです！」

「ほほう？ そんなのとは、どんなことだ？ ちゃんと詳しく言葉にして言ってみる」

「うっ、それは……！」

会長は、ちまきをからかって楽しんでいる様子がうかがえる。

意外と素直……というか単純なちまきは、そのことに気づいてい

ないみたいだけど。

「ともかく、私は生徒会長だからな。すべては私の思いどおりになる。それがこの学園のルールなのだ！」

「お……横暴です！……先生も、なんとか言ってください！」

ちまきは、自分ひとりでは会長の勢いに勝てないと悟ったのか、黙って成り行きを見守っていた担任の先生に協力を求める作戦に出たようだ。

だけど、

「ごめんなさいね、わたくしには、なんにも言えませぬわ。この学園では、生徒会長は絶対の存在ですから……」

残念ながら先生は、ちまきの助け舟とはなりえなかった。

「そ……そんな……」

へなへなとその場に崩れ落ちるちまき。

「ふっふっふ、除夜を奪いたければ、いつでもかかってくるがいい。私は逃げも隠れもしないからな」

「べ……べつにあたしは、除夜ちゃんなんて関係なくって、会長さんのやり方が横暴だって言ってるだけで……！」

ちまきはなんだか赤くなりながら、焦り声を響かせる。

「ふっ……除夜、お前はあの子から『ちゃん』づけで呼ばれているのか」

「ええ、まあ。幼馴染みなので。僕のほうは、ちまきって呼んでま

すけど」

「そうか。仲がいいんだな」

「そうですね、割と」

「割とってなによ!? それに除夜ちゃん、なに冷静に会話してんのよ!? 会長さんの言いなりで、本当にいいわけ!？」

なにやらちまきの怒りの矛先が、僕のほうにまで向いてきてしまった。

「僕はべつに、それも悪くないかな、とか」

「な……なによ、それ!? あっ、もしかして会長さんが、その……び……美人だから……?」

ちまきは、なんだかちよっと悲しそうな声で、そんなことを尋ねてくる。

「え? 美人……? ん、全然考えてなかったな……。単に変な人とは思ってなかったし」

「……除夜、お前、なかなか失礼なヤツだな。まあ、今回は不問としておくが」

僕の言葉に、会長が一瞬だけムツとしていたけど、それはともかく。

「だけど……除夜ちゃんはこのクラスの生徒で、だから、ここで授業を受けるのが自然で……」

ぼそぼそと意見を述べるちまきの声は、さっきまでの勢いを完全に失くしていた。

「悪いが除夜には、私の補佐としての役目を優先してもらおう。報告は以上だ」

勝ったと悟ったのだろうか、バシツと言いきった会長は、僕の腕を強引に引つ張って教室を出る。

「あう……除夜ちゃん……」

最後に見えたのは、とても寂しそうにうるうるした瞳を向け、僕をつかまえようとするかのように右手を前方にかざしているちまきの姿だった。

時は新世界暦十二年。

こうして僕は、生徒会長の補佐になってしまった。

狭い生徒会室で、会長とふたりきり。

ちまきに言われるまで気にしてなかったけど、会長ってよく見れば美人だし、なんだか甘くていい匂いもするし。

このドキドキは……恋？ ……それとも……やっぱり、恐怖心かな……？

次回、第二話、ドキドキ生徒会室！

……会長って、こんなパンツはいてるのか……。

今から十一年ほど前、コンピューター革命が起こった。世界中のすべての国の情報がコンピューター管理されるようになったのだ。

アメリカが主導となり、日本やヨーロッパの先進国、成長著しい中国、IT技術に強いインド、オンライン技術に長ける韓国なども協力し、全世界規模の巨大な情報ネットワークシステムが構築された。

セキュリティの関係上、中核となるシステムはすべてアメリカ側で管理、ブラックボックス化されている。

その中核部分に関しても、いくつもの企業で一部ずつを開発し、システムの全体像は誰にも詳細には把握できないようになっていったらしい。

この全世界規模の情報システムは『ギヤラクシー』と呼ばれ、多くの発展途上国も含めたすべての国に対応できるよう、何年にもわたる準備や運用実験を経て、始動したのが今から十一年前となる。ギヤラクシーのシステムを起動した瞬間のことを『ビッグバン』と呼び、その年を新世界暦元年とした。

全世界規模のシステムなんて、トラブルが起こらないはずはない。そんな懐疑的な意見もあった。

でも、新世界暦となってから今年で十二年目。開始当初は小さなトラブルくらいはあったはずだけど、これまでのところ大きな混乱が起こるようなトラブルは発生していないという。

それだけ、しっかりしたシステムとして構築されているのだろう。

ギャラクシーで管理されている情報は、公開レベルによる制限はあるものの、基本的に全世界のすべての人が汎用端末によって参照できるようになっている。

その汎用端末が、すべての人に国から支給されている、ミサングに似た形状の『エアコム』だ。

国から支給されているものだけど、実際にはギャラクシー管理の中心となっているアメリカによって作られた端末で、これが全世界の国に送られている。

前にも言ったとおり、名前や年齢などの個人情報に加え、職場や学校での役割、友人関係、所持金やら主な所持品までもがデータ化されている。

それだけだとプライベートがまったくない状態となってしまうけど、個人情報に関してはどこまで参照可能かのレベル設定も変えられるので、通常は問題ない。

友人関係であれば、名前や年齢、家の住所などを参照できるし、親友ともなれば、所持品なんかも公開できる。

レベル設定の効果範囲は交友関係だけに限られているわけではなく、役職や肩書き、立場などによっても扱いは変わってくる。

たとえば学校の先生であれば、自分のクラスの生徒の名前や住所などは参照可能になる、といった具合だ。

ただしその場合でも、個人側の設定が優先されるので、本人が拒否設定しているようであれば非公開となる。

この辺りの個人情報の取り扱いに関しても、これまでに大きな混乱や問題は起きていない。

しいて問題視されるとすれば、端末を使っていつでも情報を引き出せるため、個人情報自体が軽視され始めていることくらいだろうか。

だけど、これが当たり前となっている僕たちの世代にとって、あまり実感がないというか、気にしていないのも事実だったりする。多くの人が日記やブログをエアコムでギャラクシーのデータ上に記載し、自分のプライベートを赤裸々に明かしているわけだし。

ちなみにエアコムを使うと、頭に文章をイメージしてエアウィンドウにタッチする操作だけで、ブログの更新なんかもすぐにできてしまう。

だからかなり楽に書けるようで、日記が三日と続かない人でもブログなら続けられるようになったという話も聞く。

僕の場合、そのエアコムでのブログすら面倒で実践できていない状態だったりするのだけど……。

そんなブログなどだけでなく、各施設や団体、会社、個人などのホームページなんかも、ギャラクシー上に置かれていて閲覧可能となっている。

インターネット全体が、ギャラクシーのシステムによって包括されていると言っていていいだろう。

これらは、『ギャラクシーネット』と呼ばれることもある。

すべての情報を扱う中央コンピュータはアメリカの首都ワシントンD.C.にあるとされている。

とはいえ、実際にどうなっているのかは明かされていない。

全世界の情報を一手に扱っているわけだし、一台、もしくは数台程度のスーパーコンピュータではまかなえないはずだ。

データのバックアップ体制なども考えると、アメリカ全土の数十ヶ所に分散配置された、総合するととてもない規模のシステムなのでは、という憶測も飛んでいるとか。



でもコンピュータでの情報管理が行き届いた現在であっても、僕の両親が言うには、便利になったのは確かなものの普段の生活はさほど変わっていないらしい。

ギヤラクシーのビッグバンがあったのは、僕が四歳の頃。それ以前の生活なんて、僕にはよくわからないのだけだ。

そんな新世界暦十二年の現在、新世界暦と同様、めでたく創立から十二年目を迎えたのが、僕たちの通う都立神龍学園だ。

新たな時代を担う新たな人材育成のためのモデル校、といった名目で創られた高校、というのは僕も前から聞いていた。

僕の家から徒歩で通える範囲にあるし、気にはなっていたけど、結構レベルの高い学校でもある。

だから、僕が今この神龍学園の生徒になっているというのも、実は驚きだったりするのだけだ。

幼馴染みのちまきがこの学園を受けると言うので、なぜだか僕も一緒に受験することになった。

小さい頃から、ちまきのワガママに振り回されてはきたけど、このときは少々大変だった。ちまきが僕の部屋に毎日のように押しかけて、猛勉強させられたっけ。

ちまき自身は頭がいいから、余裕とまでは言わないまでも、この学園を受けるに足るレベルだった。でも僕は、まったく話にもならないほど。

そこから、ちまきのスパルタ教育が始まってしまったのだけだ。

頭はいいのに教え方が極端に下手なちまきのスパルタ教育は、正直なんの意味もなく、僕はほとんど自分ひとりの力で頑張って成績を上げていくしかなかった。

そんなわけで、合格通知が届いたときには、心の底から驚いた。

これは夢ではなからうか。そう考えてしまったのも、ごく自然なことだろう。

だから、入学式初日から大遅刻してしまったのも、ごくごく自然で当然の必然だったと言つて差し支えないはずだ。

……そんなことはないか……。

話は逸れたけど、僕の通う神龍学園は東京都国分寺市にある。

この場所が東京都の重心にあたる、ということ、ここに建てられたい。

自由な校風が特徴で、最も変わっているのは、やはり生徒会長についてだろう。

僕は知らなかったわけだけど、この学園の生徒会長は、どうやら先生方よりも偉い立場ということになるようだ。

基本的に会長ひとりでも決めていいことになっていて、先生方も会長の決定を実現するために協力する必要がある。

唯一学園長だけは、会長の決定を止める権限を持っているらしいけど。

ただ、学園長自身が放任主義的な立場にあるので、今までに会長の決定を覆した前例は数えるほどしかないのだとか。

僕は今回、会長補佐という役目を与えられたけど、これはかなりの特例らしい。

というか、ひとりでも決められて、実行するための協力は先生方がしてくれるなら、いったい僕はなにをすればいいのやら。

不安……というか不満が、湧き上がってくるところだ。

「そんな不満も、私の力でねじ伏せるわけだが」

「人の思考にまで割り込んでこないでください！」

僕は人外の能力を發揮したと思しき会長に怒鳴りつける。

「それはともかく。この学園についての説明は以上だ。わかったか？」

「とりあえず、わかりましたけど……」

やっぱり、変わってるんだな、この学園。……そして、この会長。

「私は普通だ」

「……………」

僕の心の中を完全に読み取っている時点で、普通じゃないと思うのだけだ。

もちろん口には出さないでおいた。言うまでもなく、これも読み取られているのかもしれないけど。

今、僕と会長は生徒会室にいる。

そこで補佐となった僕に、会長直々にお話してくれているところだ。

……もしかしたら、洗脳されているところ、と言い換えてもいいのかもしれない、といった不安も頭をよぎっていたり……。

「……まあ、納得してくれたらと思うっておこう。それでは続いて、神龍学園における生徒会長のシステムについて、もう少し細かく説明

しよつ」

会長はそう言いながら、背後にあったホワイトボードになにやら書き込んでいく。

大きな丸がふたつ。

そしてそれぞれの丸の中には、「生徒会長」「挑戦者」と文字が書き加えられた。

そしてその丸と丸の間に、さらに加えられた文字は……。

『VS』

……え〜つと……？

戸惑う僕の前で、会長は今まで書いた全体を丸で囲み、

『デュエル!!』

と大きな文字を書き殴った。

「これが、我が学園における生徒会戦拳だ」

その横に、言葉に出しながら書かれた、『生徒会戦拳』の文字。

「字が違ってる……ってわけじゃ、ないんですよ……？」

「うむ」

そう答えた会長は、生徒会戦拳の『戦』の字を丸で囲んだ。

「デュエル、すなわち戦いだからな」

会長はさらに解説を続ける。

この学園の方針として、一番強い者が生徒会長となる。そのためデュエルなのだそう。

といっても、実際に血なまぐさい戦いを繰り広げるといってもない。

これもエアコムの機能のひとつなのだけど、喧嘩や争いがあった場合、擬似空間での戦いによって決着をつけることができる。

神龍学園ではその機能を使って、生徒会長を選出……もとい、戦出する、というわけだ。

なお、この擬似空間で行われるデュエルは、周囲から観戦可能。

実際に戦うふたりは、なにもせず立っただまの状態になり、シールドに守られる。

そこから精神体が抜け出し、擬似空間内にあたかも実体が存在しているかのように、本人にも観戦している人にも見えるのだ。

もちろん、実際に己の肉体を使って戦うことにはなる。

ただし精神体だから怪我をする心配はなく、思う存分に専念できるのだという。

また、体力だけではなく、本人の様々な要素を総合した力が数値化され、デュエルで戦う精神体の能力となるらしい。

ゲーム感覚での戦いをイメージしているようで、ヒットポイントのゲージがそれぞれの精神体の頭上に表示される。

ヒットポイント以外の能力値表示はない。実際に戦ってみなければ、相手が強いのか弱いかわからないのだ。

なお、精神体は本人の姿がそのまま反映される。着ている服などもそのままだ。

デュエルは通常、学園内で行われるため、制服を着用している場合が多い。

とすると、女性の場合スカート姿になってしまっただけ。しっかりとガード機能が働くらしく、周囲の観戦者に下着を見られたりする心配はないという。

デュエルでは、痛みを感じることもない。

ただし、ヒットポイントが減る瞬間は気持ち悪く感じてしまうように、普通の人であれば一瞬動きが鈍る。

その隙を狙ってコンボを決め、一気にヒットポイントを削ることも可能なのだとか。

うーん、ほんとに、ゲームみたいだ……。

どちらかのヒットポイントがゼロになった時点でデュエルは終了。勝ち負けの結果はギャラクシー上のデータとしても残るので、ごまかしようがない。

もとは無駄な喧嘩などによる怪我や殺人なんかをなくすために開発された機能だったけど、今では様々な優劣を決める場面で使われているようだ。

「デュエルの機能で、生徒会長まで決める世の中になってるんですね」  
「そっうことだ」

僕の言葉に、素直に頷く会長。

ところで、生徒会戦拳のデュエルは、いつ開かれるか決まっているわけではない。

挑戦したい生徒がいればいつでもデュエルの申請が可能で、申請

から一週間後にデュエルが行われ、そこで現職の生徒会長が防衛するか、挑戦者が新たな生徒会長になるかが決まる。

申請できるのは一度にひとりだけで、申請があつてからデュエル終了までは、他の人がデュエル申請することはできない。

デュエルは一对一だけど、複数人で連続デュエルなんてしていたら、現職の生徒会長が圧倒的に不利なのは明らかだからだろう。

一度デュエルで負けた人が再戦することも認められてはいるけど、その場合はさらに一週間の再申請禁止期間が設けられる。

それは、連続で同じ相手とのデュエルばかりが行われる状況を防ぐという意味合いもあるに違いない。

とはいえ、基本的にいつでも挑戦を受けなければならない立場なのは変わらない。

すべてが思いどおりになるとまで言われるくらいの権限を持つ生徒会長といえども、なかなか大変な役割なのかもしれないな。

……だったらこの人は、どうして生徒会長になったのだろう？  
そんな僕の疑問は、言うまでもなく会長には読み取られていたよ  
うで。

「私が生徒会長になった理由か……それはだな……」

ふっと穏やかな表情に変え、会長が静かなつぶやきを漏らす。

「もちろん、樂をしたいからだ」

「……え？」

「会長は授業もこの生徒会室で受ければいい。ノートは自動でエア  
コムに記録されるし、先生の話なんて聞く必要もない。私は生徒会

長となつて自堕落な生活を送る。そのためにこの学園に入学したと言つても過言ではない」

……そんなこと、自信満々に宣言されても……。

困り顔の僕に、会長はさらなる宣言を続ける。

「私には姉がふたりいてな。両方ともこの学園で生徒会長をしていた。一番上の姉など、入学してすぐにデュエルで勝ち、そのまま卒業まで生徒会長を続けた最長在位記録を樹立したのだぞ?」

「それは……すごいと思いますけど……。でも理由は、楽をしたかったから、なんですよね?」

「無論だ」

迷いなく即答。

「そんなわけで、除夜、お前には私の補佐として頑張ってもらつ。私が楽をするために!」

「……………拒否権は……………?」

「ない」

もちろん即答。

僕に、逃げるといふ選択肢は、どうやら用意されていないようだった。



「ところで……」

僕は最初にこの生徒会室へと連れ込まれてからずっと気になっていたことを、ようやくここで口にする。

「会長、この生徒会室、マジですか？」

「ん？ ……ああ、そうか。確かにちょっと手狭だとは思うが……」

「いや、そういうことじゃなくて！」

大きく手を広げ、手狭な生徒会室全体を示す仕草をしながら、僕は叫ぶ。

「どうしてこんなに、汚いんですか、ここは!？」

生徒会の仕事に使うような資料でごちゃごちゃになっている、というのなら、まだマシだっただろう。

だけど、今僕の周りに広がる生徒会室の光景は、そういったものとはまったく異質なオーラを放っていた。

ちよつと狭い生徒会室のそこら中に、会長の私物と思われるバッグやらアクセサリーやらが転がっている。

そういったものを学園に持ち込むこと自体が、問題になりそうな気もするけど、僕が気にしているのはそこではない。

散乱している中には、会長の衣類なども紛れていたのだ。

体操着や靴下といったものだけではなく、下着までもが無造作に脱ぎ捨てられている状態で……。

「ふむ。そうだな。今までは私ひとりの部屋だったから気にしていなかったが、これからはお前も一緒に住むわけだから、気にしなければならぬか」

「一緒になんて住みません！ だいたい会長だって、ここに住んでるわけじゃないでしょう!？」

「まあ、確かにそうだが。しかし、トイレもシャワーも完備されているからな、ここは。たまに泊まり込むことはあるぞ?」

「そう……なんですか……」

生徒会長という立場、しかもすべてをひとりでこなす必要がある立場だから、忙しくて帰れない、なんてこともあるのか……。

僕は、頭ごなしに怒鳴りつけたのを少々反省し始めていたのだけだ。

「ここでだらだら生活していると、帰るのも面倒になることが多いからな」

「あなたはダメ人間だ!」

どうしてこんな人が生徒会長をやっているのか……。

それもひとえに、この学園のシステムの成せる業ということか……。

「失敬な。それでも私には人望があるのだぞ?」

「人望のある人の生活する場とは思えません……」

僕は視線を脱ぎ捨てられた衣類へと向ける。

あの黒いヒモみたいなのって……。会長、神聖な学園内ですっぴいどんな下着を身につけてるんですか!

考えをまたしても読んだのか、僕の視線を追った会長がこんなこ

とをのたまう。

「ふむ。興味があるか。欲しいなら持って帰っても……」

「そんなこと思ってませんし、持って帰ったりもしません！」

「ふっ、つまらない男だな」

「なんですか、それは！」

どうやら会長は、僕をからかっているだけだったようで、おもむろに脱ぎ捨てられた自分の衣服を拾い集め始めた。

さすがに会長でも、男である僕に、脱いだあとのものとはいえず着まで見られてしまつのは恥ずかしいという思いがあったのだろう。

……そんな僕の考えは、どうやら完全に間違っていたようだ。

会長は、拾い集めた衣服の塊を持ったまま僕の目の前にまで歩み寄り、そして、

「では、よろしく頼む」

と言いながら、それらすべてを僕に押しつけてきた。

反射的に腕を伸ばし、下着も含む会長の衣服を抱える僕。

「って、会長！ よろしく頼むって、なんですか！？」

「洗濯を頼むと言ってているのだ。隣の家庭科室に洗濯機があるから、使わせてもらうといい。家庭部の女子生徒がいるかもしれないが、生徒会長の命令と言えば問題ないはずだ」

「……………これって補佐の仕事なんですか？」

「無論だ」

断言された。

僕はしぶしぶ隣の家庭科室へと赴き、家庭部の女子生徒に白い目

とひそひそ声を向けられる中、会長の衣服（下着含む）の洗濯を黙々とこなすのだった。

洗濯のあと、僕は部屋の掃除や会長の私物の整理までさせられた。……私物の管理くらい自分でやってほしいところだけど、僕に拒否権はないらしい。

会長の洗濯物は、生徒会室の天井付近にロープを張り、部屋干ししている。

狭い部屋なのに、いたるところから洗濯物がぶら下がっているのは、かなり狭さを助長させる結果となっているのだけど。

それ以前に、下着も含めて干してあるから、僕としては目のやり場にも困ってしまう。

ともかく、そうやって掃除なども終わり一段落した僕は、パイプ椅子に座り、会長と一緒にコーヒーをすすっていた。

この生徒会室には、湯沸しポットも用意されている。

コーヒー、紅茶、日本茶が取り揃えられており、お菓子類も用意されている上、冷蔵庫まで完備されている。

どう考えても経費の無駄使いだと思うのだけど……。

ただ、コンロは見当たらない。火事になったら困るとい理由からだろうか。

どちらかというと、隣が家庭科室だから必要ない、という理由のほうが大きいような気はするけど。

食器類も、使い終わったら僕が隣の家庭科室で洗うのだろうか。

……だろうか、というか、おそらくそうなんだろうか。

まずまず。

大きな音を立てながら、あまり上品ではない飲み方をしている先輩はブラックコーヒー、僕はカフェオレをいただいている。

会長から労いの言葉はない。僕が補佐として仕事をするのは当たり前だと思われているのだろう。

「お前の髪はサラサラだな」

コーヒーを飲んで落ち着いたからか、会長が不意にそんな話を振ってきた。

こんな普通の会話をするのは、初めてではなからうか。

「……ええ、よく言われます」

確かに髪の毛はちょっと自慢だった。

綺麗な黒髪、というのはよく言われることだ。ちまきには、小さい頃からよく羨ましがられている。

羨ましい〜と言いながら、髪の毛を引っ張りまくるのは、やめてもらいたいところだけだ。

「射干玉というのはそういう髪のことを言っただったか。だからそんな名字なんだな」

「……いや、偶然だと思いますけどね……」

だけど、会長から髪の毛の話題が出てくるとは思わなかった。

やっぱり会長でも、一応は女性なんだな。なんて考えたら、それだけで心を読まれて死刑ものだろうか。

「で……でも、髪の毛だったら、会長も綺麗ですよね」

とりあえず、睨まれているような感じを受けたので、僕のほうか

ら会長を褒める話題に切り替えていく。

「ん？ ああ、そうか？ まあ、あまり手入れなどしてないのだから」

そう言いながらも、まんざらでもなさそうな表情を見せる会長。

「サイドテールにまとめてますけど、ゴムを解いたらかなり長そうですね。髪を洗うのも大変じゃないですか？」

「そうなのだ。水分を吸うと余計に重くなるからな、重さで首が折れてしまいそうなのだ！」

……そんなヤワな首でもないでしょうに。とは、もちろん言葉にしない。

心を読まれるかとは思ったものの、今なら気分もよさそうだから、きつと大丈夫だろうと、高をくくっていたのだけだ。

「……それにな、水を吸った髪を振り回せば、強力な武器にもなるのだ」

そう言いながらも、会長のこめかみはピクピクと動いているようだった。

そしてさらにトドメの一言。

「あゝ、それは会長らしいですね」

僕は思わず口にしてしまった。

「……待ってる。今からお前で試してやる」

「わ……わあゝ！ 冗談ですってば、会長……」

おもむろにシャワー室へ向かおうとする会長を、僕は必死になつて止めるのだった。

「そういえば会長、さっきお姉さんの話を聞きましたけど」

再びパイプ椅子に腰を落ち着け、今度は紅茶をすすりながら、僕はまだ若干不機嫌そうな会長に話しかける。

「……ああ、そうだな。それがどうかしたか？」

どうやら、若干ではなく、かなり不機嫌そうだ。

「いえ、あの、上のお姉さんは卒業まで生徒会長だったと聞きましたけど、その場合、次の生徒会長はどうなるんですか？」

「そのときは、卒業する生徒会長が指名する形になるな」

まだ不機嫌さは消えていないながらも、会長はしっかりと答えてくれた。

「上の姉は卒業の際にも伝説を残している。次期生徒会長に、一番ひよろい見た目の気弱な男子生徒を指名したのだ。頑張つて強くなれ、と言つてな」

「……その人と、面識はあったんですか？」

「いや、ひと目見て、面白いことになる……いや、この学園の未来のためになると感じたそうだ」



「……………そうですか」

「ま、もつとも、新学期早々すぐにデュエルで負け、その生徒会長は最短在位記録を更新して伝説となったようだが」

「絶対、嫌がらせですよね……………」

会長のお姉さんも、どうやらかなりひどい人のようだ。

この人のお姉さんなら、当然といえば当然なのかもしれないけど。

「だが、悪い姉ではないぞ。上の姉も下の姉も、私は尊敬している」

……………この会長の口から尊敬という言葉が出てくるなんて、正直僕は驚いた。

「もつとも、一番年下だった私は、昔からあんなことやこんなことをされ続けてきた。兄弟姉妹なんてものは所詮上下関係だからな。

だからこそ、私はそんな姉たちに負けないような、いや、姉たちを追い越すような生徒会長となることを望んでいるのだ」

「……………それは……………お姉さんにいじめられた仕返しを、ここの生徒に対してする、という極悪非道宣言とも取れるのですが……………」

「ぶっ……………さて、どうかな？」

ニヤリと笑みをこぼす会長。

「いやいや、否定してください！」

「はっはっは、冗談だ」

ほんとに冗談なのか、いまいちよくわからない。

だけど、会長の機嫌はよくなったみたいだから、とりあえずよかったとおこづ。

それにしても、生徒会長補佐なんて大変かな〜とも思ったけど、こうやって会長の話し相手になってればいいだけなのかな。

だとしたら、会長は楽をしたいだけっぽい感じだし、僕自身も結構楽できるかも。

そんなふうに考えていたのだけど。

それが甘い考えだったと僕が思い知ったのは、そのすぐ翌日のことだった。

生徒会長は、デュエルで決まる。

生徒会長を続けるには、防衛戦で勝ち続ける必要があるのだ。

……って、ええっ!?

僕が会長の代わりに、デュエルで戦うんですか!?

次回、第三話、デュエルは補佐の大仕事?

……そんな役目、聞いてないですっつてば!

朝。

ちらほらと同じ制服を着た生徒たちの背中が見える通学路を、僕とちまきは肩を並べて歩いていった。

幼馴染みで家が隣同士の僕たちは、小学生の頃からずっと、朝はこうして一緒に登校している。

幼稚園はバスだったから歩いて登園する必要はなかったけど、もちろん一緒の幼稚園だったから同じバスに乗って通っていた。

普通は中学生ともなると、男女で一緒にいることを恥ずかしく思ったり、周りから冷やかされたりとかして、若干距離を置くものかもしれない。

でもちまきは、周りから囁し立てられるのなんてお構いなしに、僕と一緒にいることが多かった。

高校生となった初日、神龍学園の入学式だった昨日は、僕が寝坊して遅刻したせいで、一緒に登校しなかったわけだけど。

僕の部屋にまで勝手に（きつとお母さんの承諾は得ていたと思うけど）上がってきて、ちまきが起こしてくれたのは覚えてる。

だけど僕は、すぐに追いつくから先に行つて、と寝ぼけながらも伝え、そのまま二度寝してしまったのだ。

結果、ひとりで遅刻して登校、生徒会長と運命の出会いをするこ  
とになった。

昨日は生徒会室に連れ込まれ、遅くまで会長の話し相手なんてしていたため、家に帰ったのも暗くなつたあとで、ちまきと一緒に下校することもできなかった。

どうやらずっと校門の前で待っていてくれたみたいなのだけど。

エアコムには電話やメールの機能もあるけど、会長に言われてマナーモードにしていたのをすっかり忘れていた僕は、ちまきからの電話にもメールにも、まったく気がつかなかった。

朝になって着信があることに気づき、メールの返信をしようとしたところで、僕の部屋にちまきが飛び込んできた。

「今日は起きてたのね」（ちっ）

おはよつの前に、そんな言葉がちまきの口からこぼれた。

その舌打ちは、いったい……。

そうは思ったけど、追求しないことにした。

まだパジャマ姿だった僕は、ちまきに玄関で待つてもらい、すぐに支度をして、今日はこうして余裕のある時間に通学路を歩いているところだった。

「それで除夜ちゃん、本当に生徒会長の補佐として、ずっと生徒会室で授業を受けるわけ？」

「うん、どうやらそうなるみたい」

「強制だったんでしょ？ そんなの、断っちゃえばいいんじゃない？」

「だけど、神龍学園では、会長は絶対的な存在なんでしょ？」

「それはそうだけど……でも、一個人の人権を無視したような身勝手は許されないんじゃない？ っていうか、あたしが許さないし」

「ちまきが許さないのは、あまり関係ないんじゃない……。それに、人権って、そこまでの話じゃないでしょ」

「そこまでの話よ！ なんでせつかく一緒のクラスになったのに、一緒に勉強できないのよ！ あたしのハッピースクールライフ計画

が台無しよ!」

「なにさ、それ」

思わず苦笑が浮かぶ。

ちまきが本当に怒ってくれているのはわかったけど、僕自身は、さほど嫌だとも思っていないのだから。

「補佐つていっても、会長の話し相手になればいいみたいな感じだし、結構気楽なもんだよ? だから心配しなくていいよ」

「心配じゃなくて!」

安心してもらおうと僕は本心を語ったのだけど、どうやらちまきは心配しているというわけではないらしい。

はて? だとすると、どういうことだろう?

「心配じゃなくて、なに……?」

「えっと、だから、それは、その……」

なにやらちまきは、顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

左右に分けている前髪から、なぜかひと房だけアゴの辺りに届くくらいまで伸ばしている前髪の先端を、無意識のうちにくわえながら、もごもごと言葉にもなっていないつぶやきをこぼす。

髪の毛の先端をくわえるのは、ちまきの昔からの癖だ。

幼い頃、ちまきのお母さんが「汚いからやめなさい!」と叱っているのをよく見かけたけど、高校生になった今でも、この癖は直っていないようだ。

と、うつむきながら歩くちまきが、なにやら必要以上に僕に寄り添ってくる。

もともとかなり近い距離で並んで歩いてたわけだけど、ちょっと歩きにくいくらいにくつつかれると、春の暖かな日差しの中だから少々暑苦しく感じるほど。

そんな文句を言ったら、殴られそうだけど。

「おい、お前！ 除夜から離れる！」

不意に凜とした声が響く。それは、生徒会長である華神桜蘭先輩だった。

「あつ、会長、おはようございます」

「って、なに普通に挨拶してんのよ！ 会長さん、離れるって、どういうことですか！」

僕とは対照的に、敵意むき出しのちまきが、僕に腕を絡めながら会長に向かって怒鳴り散らす。

「言葉どおりの意味だが。除夜は私の補佐だ。ゆえに除夜は私のものだ。昨日も言ったはずだぞ？」

対する会長のほうは、慌てた様子もなく冷静に言葉を返してきた。

「ふざけないでください！ 除夜ちゃんは、あたしのもんです！」

幼馴染みの特権なんですから！」

……いやいや、ちまきのほうにこそ、ふざけないで言いたい。

いつ僕がちまきのものになったというのやら。

そんな思いを僕が口にする隙もないほど、ふたりの言い争いは矢継ぎ早に続いていた。

「ふざけてなどいない。生徒会長の特権だ。これは学園の規則でもある。生徒であるお前には、従う義務がある！」

「そんなの横暴です！ 除夜ちゃんの人権を無視するなんて、許されるはずないです！」

……だつたらちまきにも、僕の人権を尊重してほしい。

「除夜も補佐の役目を喜んで引き受けてくれたのだぞ？ 横暴などと言われる筋合いはないと思うが」

……べつに僕は喜んで引き受けた覚えなんてないですが……。

「会長さんがマインドコントロールでもしたんでしょう！？ あっ、それとも、色仕掛けですか！？ 卑怯ですよ！？」

……なにやら、話があらぬ方向へ進んでいるような気も……。

「色仕掛けなどしていないが。しかし、そうだな……。お前のその残念な胸では、色仕掛けもできなさそうだ……。すまない……」

「な……！？ 気にしてるのに……！ それに、そんなことで謝らないでください！ こっちが惨めです！」

「それならば、勝ち誇ってやろう。ほくら、でかいだろう？ 羨ましかろう？ ほっほっほ、悔しかったらお前もこれくらいになってみる！」

「うが……！ それはもっとムカツク……！ ウキ……ッ！」

「猿かお前は。まったく、うるさいヤツだな。近所迷惑だぞ？」

「誰のせいですか！ あなたにだけは、言われたくないです！ この職権乱用女！」

「ふむ。だつたらさらに乱用させてもらおう。お前、ここで脱げ！」

「は……はあ！？ なにバカなこと言ってますか！？ だいたい

そんな特権、生徒会長にあるんですか!？」

「いや、ないな。もしあったら、男子が生徒会長になった場合、大変なことになる」

「そ……それはそうですね」

安堵の息を吐く、ちまき。

でも、もし会長にそんな特権があったとしたら、本当に脱ぐつもりだったのだろうか。

「ともかく、除夜は私の補佐だ。今日も生徒会の仕事がある。だから連れていくぞ」

ぐいつ。僕の右腕を引つ張る会長。

「だ……ダメです!」

ぐいつ。僕の左腕を引つ張るちまき。

「しかし、除夜には生徒会室に行く義務がある」

ぐいつ。

「あたしの除夜ちゃんなんですから! 一緒に教室に行つて一緒に勉強するんです!」

ぐいつ。

「いや、私とともに来てもらう!」

ぐいつ。



「あたしと一緒に行くんです!」

ぐいぐいぐい。

……………。

「痛いつてばっ!」

バツ! ふたりの腕を振り解く。

突然の爆発に、会長もちまきも目を丸くしていたけど。

「とりあえず、会長の補佐になったのは確かだから、僕は生徒会室に行くよ。ごめんね、ちまき」

僕の言葉に、会長が勝ち誇ったような笑顔を見せる。

「そうだろうそうだろう! さあ、行くぞ!」

「……………でも、僕は会長のものではないですからね」

念のため釘は刺しておく。ここで調子に乗られたらたまらないし。と、ちまきが大声で追いつがってくる。

「だ……………だったら! あたしも、会長の補佐になります!」

「それはダメだ」

ピシヤリと言い放つ会長。

「私が認めないし、だいたい、除夜ひとりだけでも特例なのだからな。これ以上は無理というものだ」

「あの……………だったら僕も、べつになりたくてなったわけでもないし、

可能なら補佐を辞めたいんですけど……」

控えめに申し出る僕を、会長は鋭い目で睨みつける。

「それはダメだ。私が許さないと断っているだろう？ 逆らったら、  
そうだな……知り合いの死神にでも頼んで消してもらおうかな」

そんなバカこと、あるわけないじゃないですか！

とは思ったものの、ふと会長の背後になにか得体の知れない気配を感じて、視線を向けてみた僕。

少し離れた辺り　あの曲がり角か電信柱の辺りだろうか、ほんの一瞬ではあったけど、なにやら黒い影がチラリと見えたような気が……。

も……もしかしたら、知り合いの死神ってのが、本当にいるのかも……？

怖くなった僕は、それ以上にも言えなくなってしまった。

それはちまきも同じだったらしく、会長に黙って引きずられていく僕の姿を、名残惜しそうな視線は残しながらも、やっぱり黙ったまま見送ることしかできないようだった。

「さて、今日の予定だが」

生徒会室に着くなり、会長が話し始めた。

「昨日も話した生徒会戦拳のデュエルがある」  
「あつ、そうなんですか」

デュエルで戦い、勝たないと、生徒会長は交代させられてしまっ  
んだったよね。

「大変ですね。頑張ってください」

僕としては、補佐の役目から解放されるだろうし、負けてくれた  
ほうがいいのかも、なんて思いもあったのだけど。

とりあえず機嫌をそこねないよう、応援の言葉を口にしておく。  
でも……。

「なにを言っている。頑張るのは除夜、お前だぞ？」  
「……はい？」

思わず疑問符が浮かぶのも、当然の反応というものだろう。  
だけど会長は、僕に向かってはつきりきっぱり、こう言いきった。

「除夜がデュエルで戦うのだ。私の代理として」  
「……………えええええっ!？」

驚きの声を上げ、混乱困惑驚愕呆然、様々な思いが頭の中で渦巻

く僕を尻目に、会長は淡々と今日のデュエルについて語り続ける。

「春休み前の申請で一週間後が春休み中だったため、今日になってしまったのだが。こうして補佐も決まり、代理を立てることができて、私としてはちょうどよかったな」

「僕は、よくないです！ 聞いてないですってば！ だいたいそんな重要なデュエルに、代理なんて立てていいんですか!？」

「ああ、代理デュエルも認められている」

必死の抵抗を試みるも、あっさり撃沈。

「もちろん、負けたら私が生徒会長から降ろされてしまうからな。除夜には死に物狂いで頑張ってもらわねばならない」

「ちょ……ちょっと待ってください！ それって、重要すぎる役目なんじゃ……!？」

「まあ、そうだな。私の未来はすべて、お前の戦いぶりにかかっていると云ってもいいだろう。任せたぞ」

そこまで信頼されている、と考えれば、悪い気はしないとも言えるのだけど。

それにしても、昨日初めて会ったばかりの僕に、どうしてそこまで委ねてしまえるのか……。

「大丈夫だ。お前なら、やれる」

「で……でも……」

負けてしまえば、補佐の役目から解放される。

だから僕がわざと負ける、というのは考えていないのだろうか？

デュエルはあくまで擬似戦闘。どんなに強く殴られ蹴り飛ばされ

て無残に負けようとも、僕自身に怪我や痛みはない。

だったらこれは、チャンスなのでは……？

わざと負けてしまえば、補佐からも解放されて、ごく普通の高校生活を送ることができるのでは……？

だけど……。

「すべて、お前に任せたからな。よろしく頼むぞ」

そう言いながら真摯な瞳を向ける会長を、僕は裏切ることができないのだろうか……？

僕が負けたら、この人は生徒会長ではなくなる。

単なるだらけきった、ワガママなひとりの女子生徒になってしまっただろう。

そんなこと、僕に耐えられるだろうか……？

……べつに構わないか。自業自得だし。

この人が生徒会長をやっているのは、楽をしたいからだと自ら言っていた。

他の人が生徒会長になったほうが、学園のためにもなるかもしれない。

僕の考えは、やっぱり会長にはお見通しのよう。

「言うておくが、わざと負けた場合、お前自身の経歴にも泥が塗られることになるぞ？ 生徒会戦拳デュエルにて代理として戦い、負けたという結果は、ギャラクシー上の個人情報に常時公開データとして永久に残されてしまうからな」

「う……」

普通の個人情報データとして残るなら、参照不可能な公開レベル設定にすればいいだけだ。

でも、常時公開データとなると、そうもいかない。

代理でデュエルに出て負けたくらいだったら、さほど大きなマイナス要素にはならないとも思うけど、それでも重要なデュエルにおいて負けてしまった人間だと不特定多数の人に知られてしまうのは、あまり気分のいいものではない。

「やっぱり、責任重大すぎますよ……。僕じゃなくて、会長本人が出たほうが……」

「大丈夫だ」

完全に弱気に支配されていた僕に、そう断言した会長の声は、すぐ目と鼻の先から聞こえ、そして。  
ちゅっ。

軽い音を響かせて、会長の唇が、一瞬だけ僕の額に触れ、そして離れた。

「……え？」

「これで私の力がお前に宿った。いわば、お前は私の分身となったと言える。だから、大丈夫だ」

「会長……」

額が、熱い。

これは、会長の力が宿った証拠なのだろうか？

「除夜、やれるな？」

「……はい」

吐息すらも感じられる、ごく至近距離からの問いかけに、僕は素直に頷き返していた。

エアコムの機能を使い、僕は昨日会長から言われていたとおり、授業を生徒会室で受けた。

そして放課後。

デュエルの会場となる校庭へと、僕は連れ出された。

会長の代理としてデュエルに出るというのに、どうやら会長自身もその場に向かうらしい。

だったら自分で出ればいいのに、と思わなくもない。

校庭には多くの生徒が集まっていた。

デュエルは擬似空間内で行われ、そこで精神体となったふたりが戦うわけだけど、周りで観戦することも可能となっている。

擬似空間自体は、どんな狭い場所でも展開させることが可能なものの、大勢の観衆がいるとなると、狭い場所で行うわけにもいかない。

そんなわけで、大抵の場合、校庭や体育館が使用されるのだという。

「……それにしたって、バカ騒ぎしすぎじゃないですかねえ？」

「そうか？ 毎度こんなもんだぞ？」

僕は驚いていたけど、会長の様子はとくに変わらない。

だけど、僕が驚くのも無理はないと思う。

なにせ会場となる校庭には、全校生徒と言ってもいいくらい大人数の生徒たちが集まっていたのだから。



『お~~~~つと！　ここで生徒会長の華神桜蘭が、補佐となった射干玉除夜を伴って登場だ~~~~！』

わあああああ~~~~！

マイクを通した声に煽られるかのように、怒涛のような歓声が沸き起こる。

「……なんか、実況までされてるみたいですけど」

「ああ。それも毎度のことだ。放送部の連中にとっては、最高の晴れ舞台らしいからな」

まさしくお祭り騒ぎ。

実際、簡易屋台まで出して、ちょっとしたお菓子や飲み物なんかを売っている人まで見受けられる。

あれって問題にならないのだろうか……。

「お。見えてきたぞ。あれが対戦相手だ」

「……………ゲツ!？」

思わず自分らしくない声を上げてしまった僕。

それほど、その対戦相手は、度肝を抜いていたわけで。

「総合格闘技部部長の三年生、はがねのきょたい鋼野巨体だ」

「本名ですか、それ!？」

「私を知るか」

ともかく、名は体を表すという言葉が示すとおり、その対戦相手は、鋼のような体を持った、とんでもない大男だった。

『レディースアンドジェントルメーデー！ お待たせしました  
~~~~！ 今年度初の生徒会戦拳デュエル！ 生徒会長代理、射干  
玉あ~~~~除夜あ~~~~！ ヴァア~~~~サーズ！ 総  
合格闘技部部长、鋼野お~~~~巨体いい~~~~！』

うおおおおお~~~~ん！！

大音量の歓声が響き渡る。

戦闘の舞台となる円形の闘技場のような擬似空間に立っている僕。  
目の前には、対戦相手の大男。

精神体となっているから、正確にはお互いに見えている姿は本物  
ではないわけだけど。

でも、実際に目の前に立っているかのように、威圧感を受ける。  
それは精神的に追い込まれていることの表れなのだろうか。

周囲には多くの生徒たちの姿が見える。

会長は腕を組み、パイプ椅子に座って試合を観戦する構え。

他には、ちまきの姿も見つけることができた。

必死になって「除夜ちゃん、頑張れ〜！」と声援を送ってくれて  
いる。

生徒会長の補佐として代理で戦う立場というのはわかっているだ  
ろう。それ自体はきつと、納得できていないに違いない。

でも、ちまきは無条件で僕の味方だ。

会長が会長のままでいられるように、ということとは関係なく、  
純粹に僕自身を応援してくれているのだ。

相手は三年生だから先輩ではあるけど、デュエルに遠慮はいらない。

会長からもそう言われている。

僕だって、負けるつもりはない。

負ければ補佐の役目から解放される。それはそれでいいのかもしれないけど。

でも、僕だって負けたくない！

……というか、こんな大男に負けたら、とんでもないことになりそうだし……。

精神体になっているから怪我の心配はないとはいえ、精神すらもスタボロにされそうな気がする……。

『レディ~~~~~、ゴオオオオ~~~~~!』

カア~~~~ン！

そんな中、実況の放送部員の声に合わせて、デュエル開始のゴングが鳴り響く。

途端、目の前に迫る巨体。

うあっ！ これは凄まじい迫力！

開始早々、気合い負けしている僕。

しかも、短パン一丁で上半身裸のムキムキ大男が、両腕を広げ抱き上げる……いや、締め上げる構え。

僕は血の気が引いた。

あの太い腕につかまったら、僕なんて一瞬で背骨が折られてしま  
う。

もちろん精神体だからそんな心配はないのだけど、ついつい怪我  
や痛みを想像して気後れしてしまうのだ。

それだけ、あの巨体から受ける威圧感は強大だった。

「除夜ちゃん〜！ 頑張つて〜！」

ちまきの声援が聞こえる。

頑張つてと言われても、こんな巨大な筋肉男相手に、スポーツと  
は無縁な僕に、どう戦えと言つのやら……。

相手の腕をすんでのところがかわし続けるのが精いっぱい。

反撃に転じるような余裕なんて、僕にはなかった。

一方的な試合。

最初こそ大声を上げて実況していた放送部員だったけど、途中か  
らは実況する気力すら失ってしまっているようだ。

見ている観衆としても、つまらないだろう。べつに僕は、観衆を  
楽しませるためにここにいるわけじゃないけど。

でも……。これは、勝てない……。

動きも体格も、すべてが違いすぎる。巨大なアフリカ象に無謀に  
も蹴りを入れようとするとする跳びネズミのようなものだ。

人間、諦めが肝心なのかもしれない。

そんな思いすら浮かんできた、そのとき。

会長と、目が合った。

「信じているぞ」

言葉にこそしなかったものの、会長の瞳は、そう語っているように感じられた。

額が、なんだか妙に熱い。

そうだ。

僕はさっき、額にキスを受けて、会長の力を宿してもらったじゃないか。

今の僕には、会長の手も加わっているということだ。

デュエルでは、本人の様々な能力が数値化され、精神体の強さに反映されるという。

その能力に会長の能力が加算されたら、それこそ百人力だ！

ああ見えて成績は学年トップクラスだというし、サボリ癖はあるものの運動能力も高いと聞く。

僕自身が並以下の人間だとしても、会長の力を得た今の僕なら勝てないはずがない！

なんだか心の奥底から自信が熱となってどんどん湧き上がってくるようだ。

額からは、あまりの熱量のせいかな、煙まで立ち昇り始めている。

「僕は……」

「むっ……？」

今までほぼ無抵抗だった僕がいきなり睨みつけたことに、一瞬たじろいだのだろう、相手の動きがピタリと止まる。

「僕は、勝つ！」

気合い一閃！

熱くなった額が、真っ先に動いていた。

そのまま僕は、巨体のみぞおち辺りに頭突きを食らわす。

「う……ぐ……熱っ!？」

あまりの勢いに思わず身を引いてしまったのだろう、相手の巨体は僕に押されるように舞台の端っこまでふらふらと下がっていく。

そしてまるで吸い込まれるかのように円形闘技場を取り囲む壁へと倒れ、自らの重みも手伝って思いっきり壁面にめり込むという結末を迎えた。

『しょ……勝者、生徒会長代理、射干玉除夜！ 今回の生徒会戦拳デュエルは、現生徒会長の防衛成功という結果になりました！』

思い出したかのように、放送部員が実況で結果報告をすると、静まり返っていた会場に一気に歓声が轟く。

その瞬間、擬似空間が消え、僕の世界はもとの僕の体に戻った。

「除夜、よくやったな」

真っ先に駆けつけ労いの言葉をかけてくれたのは会長だった。けれど僕は首を横に振る。

「いえ……会長のおかげです」

自分の力ではない。

会長の与えてくれた力のおかげで勝てた。

だから、僕には労いの言葉を受ける資格なんてないと考えたのだ。

「ん？ 私はなにもしていないぞ？」

「キスしてくれたじゃないですか」

「キ……キスう〜!？」

僕の言葉に驚きの声を割り込ませてきたのは、会長に続いて駆け寄ってきていたちまきだった。

「ちょっと除夜ちゃん、どういうことよ!？」

「どづいうことって、言葉どおり……」

「か……会長さんと、キスしたのっ!？」

なんでそんなに目を血走らせて、怒鳴りつけるように声を荒げているのだろう、ちまきは。

「うん、まあ。僕の額に……」

「あ……なんだ。額、なのね……」

ちまきは、なぜだかほっと安堵の息をつく。

「ああ、なるほど。あの額のキスのことを言っていたのか」

「ええ。そのおかげで会長の力が僕に宿って、それであんな大男の先輩にも勝てたんですね?」

「いや、違うぞ。あんなの、単なる嘘に決まっているじゃないか」  
「え?」

「口からでまかせ、そう言ったままで。私はあんな脂ぎったデブなんかと戦いたくなかったからな。いくら精神体でニオイなども感じないとはいえ、目の前にあの巨体があるというだけで嫌気が差すだろう?」

「そんな理由で僕に戦わせるなんて! 勝ったからいいようなものの、負けてたらどうする気だったんですか!？」

「まあ、負けたら負けたでべつにいいだろう。世の中、なるようにしかならないからな」

なんだか、ちょっとカッコいい、と行ってしまった自分は、少々感覚がズれているのだろうか。

と、会長が突然僕をぎゅっと抱きしめる。

「つまり、私とお前は一心同体ということだ」

「会長……」



「ちょ……！？ なにやってんのよ、ふたりとも！ 離れなさい！」

ちまきが僕と会長を引き剥がそうと躍起になるけど、会長は面白がってさらに強くひつついてくる。

「もう！ さっきみたいに、また燃やすよ!？」

どうやら勝てないと悟ったのか、一旦距離を取り、ちまきは両手でなにかを握って目の前にかざした。

「また燃やす……って、どういう……ああっ!？」

ちまきが目の前にかざしているのは、虫眼鏡だった。

その虫眼鏡に、地平線近くまで下がってきている太陽の光を集め、僕の額へと向けている。

「熱ちちちちちっ！ やめてよ、ちまき！」

そして僕の額からは、さっきと同じように煙が上がる。

さっきと違うのは、精神体ではなく実体だから、その熱さが尋常じゃないということだけ。

つまり、デュエル中に感じた額の熱さは、僕に宿った会長の力ではなく、ちまきのイタズラだったということだ……。

「そんな危険なこと、しちゃダメだってば！」

「されたくなかったら、会長さんから離れなさい！」

「そんなこと言ったって……」

「ふっふっふ、除夜は私のものだからな。離したりはしない」

「だったら、今度は会長さんのほうに光を……」

「それはもっとダメだってば！」

「あ~~~~！ 除夜ちゃん、こんな女の肩を持つっていつの!？」  
「お前、先輩に向かつて、こんな女呼ばわりか？」  
「む、なんでこんなことになってるんだ……」

このときになって、僕はようやく気づいた。

周りにはデュエルを観戦していた、ほぼ全校生徒と言っているほどの人たちが集まっていたということに。

『おお~~~~っ！ これは面白いことになっております！ 射干玉除夜を巡って、生徒会長ともうひとりの女子生徒 ふむふむ、一年生の柏葉ちまきという名前の生徒ですが、彼女との三角関係愛憎劇が繰り広げられている模様です!』

おおおおお~~~~~~~~!

放送部員の実況に合わせて、デュエルのときよりも大きな歓声が沸き起こる。

『ここから先も、完全実況生中継でお送りさせていただきますと思います!』

「やめてくださいっ!」

僕は会長とちまきのそばからどうにか離れ、意気揚々と実況を続ける放送部員にツッコミを入れたのだった。

春といえば桜！ 桜といえばお花見！

その思考回路は、オッサン化してませんか？

……痛たたたつ、殴らないでください、会長！

次回、第四話、全校お花見大会！

え？ 会長……？ ちょ、ちょっとなにをしてるんですか！？  
う、うわぁ〜っ！

「春ですね」

「春だな」

生徒会室の窓から見える景色は、どこもかしこも桜だらけ。舞い散る桜色の花びらたちが、視界を温かく染め上げる。

こうやってエアコムのウィンドウに映し出される先生の話をただぼーっと眺めるだけの授業にも、だいぶ慣れてきた気がする。

でも今ごろ、教室ではちまきを含めたクラスメイトは机を並べて、直接先生の声を聞いて授業を受けているのだろう。

僕の状況は、気楽でいいものの、ちょっと寂しくもある。

クラスメイトのみんなって、僕がいなくても関係ないのかな？

……入学初日からこんな生活だし、僕の顔も名前も覚えていない人だって多そうだけど……。

だいたい高校生活っていうのは、交友関係を広げる場でもあるはずなのに、こんなふうに生徒会室に引きこもる日々なんて……。

でもそう考えたら、会長だって同じことなんだよね。

いつから生徒会長をやっているのかは聞いてないけど、僕が補佐になるまでは、ずっとこの生徒会室でひとりぼっちだったということになるわけだし……。

会長……もしかして、ひとりで寂しかったから僕を補佐にしたのかな……？

「ん？ 除夜、どうした？」

「あ……いえ、なんでもありません」

つい会長を見つめてしまい、僕は慌てて視線を逸らす。逸らした視線の先には、桜の花びら。ゆらゆら舞い踊る花びらは、なんとなく切なさを助長させるような気がする。

「桜が綺麗だな」

「はい、そうですね」

「よし……。春といえば桜、桜といえばお花見！ というわけで全校花見大会を開くぞ！」

「え……？ 全校つて、そんなこと勝手に決めていいんですか！？」

「いいのだ。私は生徒会長だからな」

……そうだった、ここはそういう学校だった。

「善は急げだ。早急に先生方への報告と全校生徒への告知をせねばならないな。これは忙しくなるぞ！」

なんだかノリノリの会長。

でもまあ、僕としても悪い気はしない。

そういったお祭り騒ぎイベントも、古臭い言い方にはなるけど高校生活を彩る青春のページ。準備の段階では大変かもしれないけど、当日は生徒会長補佐という身でも思う存分楽しむことはできるだろう。

素早く先生方への報告をし、簡単な役割分担を決めたあと、僕と会長は生徒会室へと戻ってきた。

思いつきで開催を決めた全校お花見大会のはずなのに、会長はしつかりと頭の中で計画を組み上げていったようで、準備として必要なことや当日のスケジュールなどを説明し、てきぱきと先生方に指示を出していた。

楽をしたいから生徒会長をしている、なんて言っていたけど、やるときはやる人なんだと思い知らされた。

思わず会長に尊敬の眼差しを向ける。

と、そんな僕に、会長はこんな命令を下した。

「よし、あとはお前の役目だ。全校生徒に告知するためのポスターを大急ぎで作ってくれ」

「僕が、ですか？」

「そうだ」

「言い直します。僕だけが、ですか」

「そうだ」

「……………」

「中央掲示板に大きなポスターを一枚、教室棟の各階に一枚ずつは最低限必要だが、それ以外にもある程度の範囲ごとに一枚ずつは貼っておきたいところだな。教室棟は、各階それぞれ三枚ずつにするか。そうすると全部で……………三十枚くらいあればいいか」

「鬼ですか、あなたは!？」

「ん？ 私は生徒会長だ。つべこべ言わず、早く作業しろ」

「……。どうやら僕がポスターを描くのは確定なようだ。それも、三十枚……。」

「会長は、なにをするんですか？」

「私はなにもしない。楽をしたいから、お前を補佐にしたのだ。当たり前ではないか」

……こんな人を、一瞬でも尊敬の眼差しで見てしまった僕がバカだった……。

「カラーの太ペンや絵の具なんかもあるからな。適当に使って描いてくれ」

「手描きしろってことですか？ 僕、絵心もデザインのセンスもありませんよ？」

「魂で描け」

「そんな無茶な……」

反論していても、どうせなにも変わらないことが目に見えている僕は、しぶしぶながらポスターを描き始める。

とりあえず太いペンで文字を大きく書いて、あとは適当に模様でも描く程度でごまかそう。

全校お花見大会を開催することその日時や場所さえわかればいいはずだし。

「そつえば場所はどうするんです？」

「学園内の公園を使う」

「……学園内に公園があるんですか……」

神龍学園が膨大な敷地を誇るといのは聞いていたけど、どうやら想像以上らしい。

「公園だけじゃない。小さいが森もあるし湖もあるぞ」

……想像以上というか、想像を遥かに超えていそつだ。

「あとは……お花見だし、酒の手配も必要か……」

「……………つて、それはダメです！ 未成年なんですから！」

いくら生徒会長といえど、国の法律を破るわけにはいかない。それに、学園内で飲酒なんて、教師だけだったとしても問題になっってしまうだろう。

「むう、つまらん。しかし、お花見に酒がないのは寂しいな……………」

「そうだ、甘酒にしておこう！」

「それなら、まあ……………」

いろいろと苦労しつつも、こうして全校お花見大会の準備は着々と進められていった。

ちなみに。

開催告知のポスターは、校内のいたるところに貼るだけでなく、スキャナで取り込んでデジタルデータ化し、ギャラクシーネット上の学園サイトにも貼りつけられた。

……………それなら一枚だけ書いて、デジタル化したものをプリントアウトすればよかったのに。

文句をぶつける僕に会長は、

「やっぱり手描きの温かみを感じられるポスターのほうがいいだろうっ。」

と、あっさり答えるのだった。



それから数日後。

全校お花見大会は予想以上の盛り上がりを見せていた。

生徒たちにとっては、午後の授業を潰してのお祭り騒ぎだからというのも、盛り上がっている要因になっているようだ。さすがに丸一日の授業を潰すことまではできなかつたみたいだけど、半日だけでも充分と言えるだろう。

それに、生徒たちだけでなく先生方も盛り上がっている様子がかがえる。

生徒には甘酒が用意されているけど、先生方には結局、日本酒やビールが振舞われることになった。そんなわけで、先生方もかなりの上機嫌。

仮にも学園の敷地内、しかも一部の授業を潰して行われるお花見イベントでお酒を飲むなんて、果たしてこれでいいのだろうか？

「いいのだ」

会長は断言する。だったら、いいだろう。

もし問題になったら、会長を止めなかつた学園長の責任となるはずだし。

飲んでるのが甘酒とはいえ、お花見の楽しい雰囲気呑まれ、僕自身もかなり気分が高揚していた。

ただ少々不満があるとすれば、補佐なのだから当然だろう？ とばかりに、ずっと会長と一緒にいるということだけだろうか。

べつに会長と一緒にいるのが嫌なわけでもないけど、こっぴどい

ベントだったらクラスメイトとも交流できるかも、と考えていた僕の淡い希望は脆くも崩れ去ったことになる。

もっとも、ひとりだけ、今も一緒にいるクラスメイトがいるのだけだ。

「うーん、綿菓子美味しいー！ リンゴ飴も定番よね！ あと、たこ焼きと焼きそばと、それから……」

綿菓子を口いっぱい頬ばりながらご満悦な表情をさらしまくっているのは、もちろんちまきだ。

「食べすぎだつてば」

「いいじゃーん！ せっかく屋台まで用意してくれたんだから、買ってあげなきゃ悪いでしょー？ もぐもぐ」

そう、用意されていたのは甘酒などの飲み物だけではなかったのだ。

様々な食べ物などを売る屋台までもが、学園の敷地内にあるこの公園に、所狭しと並んでいる。

公園自体はそこまで広いわけではなく、しかも全校生徒が参加しているため、スペースに余裕なんてほとんどない。

それなのにこんな屋台まで準備されているなんて……。

自治体が開催するような規模のお祭りや花火大会みたいに、人が溢れてごった返しているといった印象すら受ける。

実際には、歩くのも困難なほどの密度ではないけど、ゆっくりと桜の花を観賞するという雰囲気じゃないのは確かだった。

でも、花より団子。食べ物や甘酒などに舌鼓を打ち、大声を上げ

て馬鹿騒ぎする。

そんな時間は決して無駄じゃないはずだ。

こんなこと、学園の行事としてやってしまっただけでよかったのか、疑問の念は残るものの、参加している生徒たちの笑顔を見ると、これはこれでよかったのだと思えてくる。

……さすがにちまきは、楽しみすぎだと思っけど。

「やっぱり、お花見ていいわよね〜」（もぐもぐ）

「ちまきは絶対、お花見以外を楽しんでると思っけど」

「まあ、そう言っつな、除夜。せっかくのお花見だ、お前も心から楽しんでおけ」

「そうそう、楽しもうよ」

ぐいっ。

「ん、でも……」

「楽しめ。会長命令だ」

ぐいっ。

「え〜っつと……」

なにやら僕の左腕はちまきに、右腕は会長に絡みつかれ、しかもぐいぐい引っ張られているのだけど……。

ふたりとも笑顔ではあるものの、あいだに挟まれた僕の背筋には、猛烈な寒気が走っている状態で……。

この状況で楽しめるはずなのでは……。

などと口が裂けても言えない自分が、少々恨めしい。

「あたしだってね、食べてばっかりじゃないのよ？ ほら、見てみなさいよ。桜の花の背景に青空が、とっても綺麗よね。」

「ああ、そうだな。木漏れ日にきらめいて舞い散る花びらは格別だし、さらには城の景観まで映り込む……。最高のロケーションだろう？。」

「……なぜに城……。」

実際に見上げてみれば、本当に城の姿が目映る。

学園の敷地は広く、お花見大会の会場となっているこの公園の他に、森や湖なんかもあり、そして今現在、建設中の城まである。

西洋風の城で、学園のシンボルにしたい、という理由で建てられているのだとか。

存在は知っていたし、遠目に見たことくらいはあったけど、こんなに近くから見上げたのは初めてだ。

なんとというか、あまりの大きさに圧倒される。

……どうでもいいけど、学園の敷地内に城なんて建てていいものなのだろうか……。

「やあ、サクラン会長。みんな楽しんでいるようだね。」

不意に声をかけられた。正確には、その言葉どおり、会長が、ということになるけど。

声をかけてきたのは学園長だった。

「これは学園長。とてもよいお花見大会になり、私としても嬉しい限りです。」

「先生方まで楽しんでるようだし、学園側にとってもいい行事と

なったんじゃないかな？ もちろん俺も満足しているよ。……こうしてビールも飲めるしね。ヒック」

学園長は、しっかりとビールを飲んでいた。しかもビンごと持ってラッパ飲み。

かなり顔が赤い。足もとも覚束ないし、酔いが随分と回っている様子だ。

……大丈夫だろうか、この学園長。

こくぶんじすみただ  
国分寺純忠。

神龍学園の学園長を務める偉い人だけど、とてもそんなふうには思えない。

どう考えても三十代前半くらいにしか見えない容姿。

どうやら実年齢は四十代に突入しているらしいけど、学園長といったら、普通はつるっパゲのおじいさんと相場が決まっているというのに。……これは偏見だろうか。

「あの……」

少々控えめに声をかける。

「ん？ なんだね？ 確かキミは、会長の補佐の……」

「はい、射干玉除夜です。それで、あの城って、いったいなんのために建ててるんですか？」

「あれは学園のシンボルだよ。イメージ戦略というのは、学園にも大切なものでね」

僕の質問に、とくに言葉に窮することなく、学園長は答えを返してくれた。

「だけど、なんとなく納得がいけない。今さらこの学園にイメージなんて……。」

悪い意味ではなく、新世代のモデル校としての地位や学業レベルの高さは、すでに充分知れ渡っているはずなのに。

それに……。」

「失礼かもしれませんが、そんなシンボルなんかは資金を使うなんて、すごく無駄なんじゃないでしょうか？ 城を建てるのって、膨大な金額がかかると思うのですが……。」

「そんな心配はいらないよ。この学園は、東京都としても力を入れているモデル校だからね。資金も多いんだ。それに……。」

「それに……？」

「城の建設は、都知事からの提案でもあるんだよ。」

学園長の言葉に、僕は驚く。

もちろん、都立高校で東京都としても力を入れているモデル校なのだから、設備投資に積極的なのは不思議ではない。

「だけど、それにしただって城まで建設するのは、イメージアップ戦略としても少々行き過ぎている感がある。」

「……どうして都知事がそんな提案を？」

「さあ？ 親父の考えなんて、俺にはよくわからないな……。」

「親父？」

「ああ。知らなかったか？ 俺の父親は、東京都知事なんだ。」

今の東京都知事は、こくぶんじただお国分寺忠翁という人だったはず。確かに、学園長と同じ名字だ。

「……なるほど、だからこんな若い人が学園長の地位に収まっているのか。」

口には出さないけど、それは納得できた。

でも、どうして城なのかは、やっぱり納得できない……。

「おっと、引き止めてしまって悪かったね。それじゃあ、俺はこれで」

「はい。学園長、あまり飲みすぎないようにしてください」

「はっはっは、心配ありがとう」

酔いで真っ赤な笑顔を残し、学園長は千鳥足でふらつきながら去っていった。

「学園長、完全に酔っ払ってたね」

「そうね」

学園長が去ったあと、僕とちまきは雑談を再開した。

「ちまきは学園長がいるあいだ、まったく喋らなかつたね」

「学園長なんて偉い人相手に、そうそう喋ったりはできないわ。除夜ちゃんをよく、あんなに質問をぶつけられたわね。ちよつと失礼だったかもしれないわよ？」

「え？ そうかな？」

僕としては率直な疑問をぶついただけだったのだけど。

「酔っ払ってたみたいだから、覚えてないかもしれないけど」

「そうであってほしいかな」

普通にこうして会話している今でも、ちまきは僕の左腕に絡みついてたままだ。同様に会長のほうも、右腕に絡みついていてる。

ということは、さっき学園長がいるときも、ずっとそうだったことになるわけで……。

両手に花状態の僕を見て、不埒な生徒だなんて思われてないといけど……。

と、そこで気づく。

普段ならともうるさい会長が、今はやけに静かだということに。

静かにしてはいるけど、僕の右腕にしっかり絡みついたままの会



長。

でも、なんとというか、余計に強く、痛いくらいに絡みついているような……。

「会長……?」

「ん? なんら?」

え? なんら……???

「除夜、どうしたのら? うい、ひつく……」

「か……会長おゝ!? もしかして、酔っ払ってます!?!」

「なにを? わらちは、酔ってなど、いないろ? ひつく!」

「あらら、会長さん、完璧に酔ってるみたいね……」

ちまきが言うまでもなく、顔は真っ赤で、足もともふらふら。

僕の腕に痛いくらいに絡みついていたのは、どうやら自分の足で体を支えることができずに、倒れないようにつかまっている状態だったからのようだ。

「あ……もしかして、さっきの学園長のアルコールを含んだ呼気で酔っ払っちゃったってこと!?!」

「ん、それよりも、甘酒の影響じゃないかな? あたしほどじゃないけど、会長もいろいろ食べながら甘酒を飲んでたし」

僕の推測に、ちまきが別の意見をぶつけてくる。

「え? でも甘酒って、アルコール入ってないよね?」

「製法にもよるのよ。簡単に作る場合には、酒粕から製造することもあるし、大量に飲んだら、小さな子とかアルコールに弱い人なんかだと酔うこともあるみたいよ?」

「そ……そうだったんだ……」

いくらアルコールが若干入っていたとしても、ちまきならともかく、会長はそこまで大量に飲んでなんていなかったはずだけど……。とすると会長は、アルコールに極端に弱い体質ってことになるのかな……？

とはいえ、原因がわかったところで状況が変わるわけでもなく。

「うう。除夜。なんだか目の前がぐるぐる回ってるぞ？ あはははは、なんだこれは？ 面白いな！ ひっく！」

「こんな会長の姿が見られるなんて……。お花見大会、最高だわ！」  
「そんな、面白がってるような状況でもないと思うけど……」

右腕に絡みついたまま酔っ払ってはしやぎまくる会長と、左腕に絡みついて会長の普段では見られない様子を楽しんでいるちまきに挟まれ、成すすべのない僕。

と、突然会長が暴れ出した。

「こらお前！ 除夜はわらちのものら！ 離れるのら！」

反対の腕に絡みついてるちまきを、引き剥がそうとし始めたのだ。

「な……なによ！？ 除夜ちゃんはあたしのもですよ！？ 勝手に所有権主張しないでください！」

……それはちまきにも言いたい。

「これは、わらちのら！」

そう言いながら、片方の腕で僕に絡みつinaながら、反対の腕でちまきを思いつき突き飛ばした。

「きゃっ！」

「ふっ！ 勝利にゃっ！」

地面に投げ出されて倒れるちまきと、勝ち誇る会長。

……あ……、倒れた拍子にちまきのスカートがめくれ上がって、下着がちらりと……。

こ……これは見なかったことにしておこう。そうしないと、僕の身が危ない。

それにしても、会長はどうやら少々、というかなり酒癖の悪い様子。

今後、絶対にお酒は飲まないよう、釘を刺しておくべきかもしれない。

「除夜あゝ、ひっく！」

「うわ、酒臭いですってば！」

僕にしなだれかかる状態の会長の顔は、すぐ目と鼻の先にあつて、甘酒の甘い感じではあるけど、お酒特有のニオイが鼻をかすめる。だけど、僕の文句の言葉は、すぐに止められることになった。

「ん……！？」

気づいたときには僕の唇は、会長の唇がぴったりと……というよりもぐっちよりと重ねられ、完全に塞がれていた。

「わ……わぁ〜〜！ なにしてるんですか！」

叫んだのは僕ではなく、会長に突き飛ばされて倒れたままのちまきだった。

僕も叫びたかったけど、口が塞がれているのでは、声の出しようもない。

だいたい、初めてだったのに……。  
ファーストキスが甘酒味……って、これはどうなのだろう？

甘酒のせいなのか、それとも他の要因か、頭がぼーとなった僕は足の力が抜け、膝立ちの状態になってしまう。  
でもそれでようやく唇は離れた。離れてもなお、ほのかな温もりと甘い香りは、僕の唇に余韻として残っていたのだけ……。

ただ、目の前にたたずむ会長の様子は、なんだかまだおかしいよ  
うで。

ふらふらした様子で立ちすくむ彼女の目は虚ろ、赤かった顔も徐々に青ざめてきていて、右手をそっと自分のおなかの辺りに添えている。

そして、前かがみになった状態の会長の顔は、僕のすぐ上にあっ  
て……。

あ……なんだか、嫌な予感……。

思わず他人事のように冷めた感想が頭をよぎった。  
次の瞬間、



いと思った僕は、どうにか彼女をなだめようとする。

……まだ顔面に会長の吐き出した嘔吐物をべったりと貼りつけたまま……。

「うわあ、寄るな触るな近づくな半径三メートル以内に入るんじゃない、ばっちい！」

ちまきは心底嫌そうな顔をして、どこかへ走り去ってしまった。

そう言われても仕方がない状態なのは確かだけど、こんな言われ方をして逃げられるのは、さすがにちよつとショックかも……。

このままちまきを追いかけて、嫌がらせで抱きついて顔を思いつきりこすりつけてやるうか、とも思ったけど思い留まった。どうせあとで、もっとひどい仕返しを食らってしまうに決まっているから……。

僕の横では会長が苦しそうに地面に手を着いて荒い息を吐いている。

息だけじゃなく、まだ出し足りなかったのか別のものも吐き出していただ。

とりあえず自分の顔をどうにかしたい。でも、この状態の会長をひとり残していくわけにも……。

周囲の人たちも二オイに気づいたのだろう、僕と会長の周りだけ避けるように円形の空間ができていた。

どうしたものか、思案に暮れている僕。しばらくおろおろしていると、誰かが駆け寄ってきた。

「はい、これ使って」

そう言って濡れたタオルを差し出してくれたのは、逃げたとばかり

り思っていたちまきだった。

「あっ、ちまき。ありがとう」

僕はタオルを受け取って、顔に付着した嘔吐物を拭き取っていく。その横で、ちまきは苦しそうにしている会長に気づき、背中をさすってあげていた。

なんだかんだ言って、結構面倒見がいい女の子なんだよね、ちまきって。

会長の具合はよくないようで、地面に突っ伏し、そのまま眠ってしまった。

とはいえ酔いが原因なら少し休めば大丈夫だろう。甘酒で、しかも量も多くなかったから、急性アルコール中毒の心配もないはずだ。そう考えた僕たちは、しばらく休んで落ち着いてから、会長を生徒会室へと運んだ。

僕が会長をおぶって生徒会室へ向かったわけだけど、背中に大きなふたつの柔らかい温もりが感じられて、これはこれで悪くないかも、なんて思っていたのだけど。

その道中において、おぶっている揺れに反応したのか、僕の首筋には何度も嘔吐物が降りかかることになってしまった。

生徒会室でシャワーを浴びて上着をとりあえず体操着に着替え、ちまきも僕のあとにシャワーを浴びて、ようやく一段落したところで、会長は目を覚ました。

全校お花見大会の途中から、まったく記憶がないという会長。まあ、あの状態を考えたら、そうだろうなとは思っけど。

僕としては、べつに会長を責め立てるつもりなんてなかったから、なにかあったかは、あえて言うこともないだろうと考えていた。

だけどもちまきは容赦なく、会長が吐いてそれが僕の顔面にかかって、とつても大変だったと喋ってしまった。

その直前のキスの話を端折ったのは、ちまきの気遣いなのか、それとも別の思惑があったのか。

「そ……そんなことがあったのか……」

「そうですね！ 大変だったんですから！ 除夜ちゃんに謝ってください！」

「ああ、除夜、本当にすまなかった。このとおりだ、許してくれ！」

まだ頭がはつきりしていないのだろうか、会長はちまきの怒号の勢いに負け、僕に向かって素直に謝る。

それも、綺麗な土下座をして平謝り状態。

「い……いえ、いいですってば！ 頭を上げてください！」

「う……うん。もうそれくらいで充分だと思えます」

今までの恨みとばかりに調子に乗って、嫌がらせのように責め立てていたちまきでさえも、さすがに罪悪感に駆られたのか、慌てた様子で僕と一緒に会長をなだめにかかった。

だけど会長は、

「いや、こんなものでは私の気がすまない。本当に悪かったと思っているー！」



そう言いながら、それから一時間以上ものあいだ、土下座を崩すことなく謝り続けた。

なんというか、他人の顔面に吐くなんて失態を犯したわけだから、罪悪感を抱いてしまうのも当たり前かもしれないけど、それでもちよつとかわいそうなくらいだった。

会長つて、不測の事態にはめっぼう弱い人なのかも。そんな思いを抱いた瞬間だった。

とつてもつるさい女の子、菱餅先輩が生徒会戦拳のデュエルを申請。

つて、やっぱり戦うのは、僕なんですか!?

次回、第五話、菱餅の挑戦状!

……会長をお姉様と呼ぶあの子つて、もしかして……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8645x/>

---

独裁生徒会長サクラン

2011年10月24日02時05分発行